

- 01 巻頭言
石原 邦夫 「『集団知』と『不厭高』」
- 02 特集
**2010 年度（第 25 回）
経済同友会 夏季セミナー〈後編〉**
- 15 リレートーク
杉江 和男 「化学の役割」
- 16 委員長インタビュー
欧州委員会 永山 治
- 17 経済同友会最前線
欧州委員会 欧州ミッション報告書
アジア委員会 韓国ミッション報告書
2009 年度企業経営委員会
「企業経営に関するアンケート調査」
第 98 回 TCER セミナー
有吉 章 一橋大学 国際・公共政策大学院 教授
「欧州経済の債務問題について」
- 24 コペンハーゲン通信
「与野党論戦から見えてきたもの」
- 25 同友会スケッチ
2010 年 8 月の記録と 10 月の予定
- 26 私の思い出写真館
秋池 玲子
「産業再生機構での経験」



副代表幹事
中国委員会 委員長
石原 邦夫
東京海上日動火災保険
取締役会長

「集団知」と「不厭高（高きを厭はず）」

三十年前、世界経済が中国やインドよりはるかにわが国を重要視していたころ、日本の優位分析が盛んに行われた。代表は、エズラ・ボーゲルの“Japan as No.1”である。資源に恵まれぬ日本の顕著な成功の「要因を一つだけ挙げるとするならば、それは集団としての知識の追求」だと説いた。曰く、日本には生涯学習の観念が根付き、一握りのエリートでなく広範な関係者が知識習得に努める。また、意見相違の決着に情報収集が用いられることで、論争や力関係による決定に比べ、より説得力が増すのではないかと。

確かに、集団知を形成するシステム（後輩の指導育成や、チーム単位の切磋琢磨を奨励する職場環境など）のメリットは大きい。こうした風土があれば、難題を一人が背負い込まず、組織力で対応することができる。デカルトは困難を分割せよと言ったが、わたしは、共に働く人々が有機的に問題を解決する姿を、「困難の因数分解」と呼ぶことにしている。これによって問題解決のみならず、感動も共有できる。

さて、中国の英雄曹操は詩歌に優れ、「短歌行」は文選にも収載された。その中に“山不厭高（山は高きを厭はず）”の句がある。高きを厭わざるは、経営に通じる。目標を、高く晴れ晴れとしたところ、全力で取り組むに値する場所に掲げること、進歩の原動力である。

一方、高みに届くには、根気が必要である。一步一步を軽んじては、遠路を達しおおせない。商品を開発するには技術を骨まで叩き込み、事務を改善するには工程に通曉せねばならない。志と、努力の蓄積をもって、道は開ける。

不厭高の心を、個人でなく組織で体現し、集団知を発揮させるなら、大事を成し得る。日本の躍進を支えたのは、両者の相乗ではなかっただろうか。

昨今、若者を画一的にとらえた批判を目にする。人間関係が希薄だとか、目標に淡白などの傾向は多少あるかもしれない。しかしよく見れば、責任感や向学心があり姿勢も真つすぐな若者が多い。国の将来は、若者の成長と活躍にかかっている。彼らを熱く燃え立たせるのが、社会の先輩の責務である。

志を得て、日々の努力で実現しようとする若者が増えれば、なんと愉快なことではないか。それには若者の集団が互いに高め合う環境をつくるのが肝要である。

ビジネスリーダーたる者、志を高く持ち、労苦を厭わず歩み続けるようでありたい。逆境に心で泣いても、顔は笑って着実に高みを目指してゆく。そして、若者たちが競って後に続く。こうしたプラスの循環が生まれることによって、日本社会の未来が、さらに明るく頼もしいものになってほしいと思う。